

中近世ハンザ都市における ビール醸造業について

斯 波 照 雄

目 次

はじめに
醸造業の都市経済への影響
輸出醸造業の展開
おわりに

はじめに

中近世ハンザ都市では、その経済基盤を遠隔地貿易に置き、都市内に有力な手工業種を持たず、特産物の生産は盛んとはいえなかった。その中で例外的であったのが、ビール醸造業といえるであろう。水がそのまま飲めない、ブドウが栽培できない北ドイツ地域ではビールの需要は多く、各都市で生産されていたし、ビールは輸出品として、また、地域内消費の有力商品として重要であったと考えられる。リューベック Lübeck においてもビール醸造は盛んであったが、ハンザ都市の中でもブレーメン Bremen、ダンチヒ Danzig、ハンブルク Hamburg、ヴィスマール Wismar のビールは輸出品としても有名であった。

このように、中近世ハンザ都市において有力商品でありながら、ビール

が都市経済に与えた影響については、近年に至るまでドイツのビール醸造業史研究の一部としての研究や¹⁾、ハンブルク、ヴィスマールなどのビール輸出が盛んなハンザ都市に関する個別研究が残されているにすぎなかった²⁾。その後、中近世における主要ハンザ都市の醸造業の動向に関する総合的な研究書が公刊されたが³⁾、醸造業が都市財政など都市経済に与えた影響については、なお検討が不十分であるように思われる。少なくとも我が国においては、都市経済に醸造業の果たした意義について、十分に検討されてきたとはいえない。

ハンザが盛期から停滞に向かう中で、ハンザ都市においてビール醸造業がその経済にどのように貢献してきたのかを明らかにするためには個別都市研究の集大成が必要であろう。ハンザ都市といえどもそれぞれ特色、特徴があるからである。そこで本稿ではその第一歩として、市内に傑出した輸出手工業をもたない、国際的な仲介商業への依存度が高いリューベックと、ビール以外の輸出手工業を有する内陸のハンザ都市ブラウンシュヴァイク Braunschweig、ビール醸造業とその輸出が盛んなハンブルク、ヴィスマールを対象に、15、16世紀におけるビール生産と消費、それにとまなう税が都市経済に与えた影響について比較検討し、ハンザ都市経済における醸造業の意義について考えてみたい⁴⁾。

-
- 1) H. Huntemann, Bierproduktion und Bierverbrauch in Deutschland vom 15. bis zum Beginn des 19. Jahrhunderts. Phil. Diss. Göttingen Univ. 1970.
 - 2) F. Techen, Das Brauwerk in Wismar. I , II . Hansische Geschichtsblätter (以下 HGbl. と略す). 1915, 1916. W. Bing, Hamburg Bierbrauerei vom 14. bis 18. Jahrhundert. Zeitschrift des Vereins für hamburgische Geschichte. (以下 ZVhG. と略す) Bd. 14. 1908.
 - 3) ハンザ都市の醸造業に関する総合的な文献としては C. v. Blanckenburg, Die Hanse und ihr Bier. Brauwesen und Bierhandel im hansischen Verkehrsgebiet. Hansische Geschichtsquellen(以下 HGq. と略す). Neue Folge. Bd. LI. Köln 2001. が挙げられる程度である。

醸造業の都市経済への影響

ビールはもともと北ドイツ地域では自家醸造が広く行われていたと考えられ、その醸造法も、品質、生産量にも制限がなく自由であったと思われる。しかし、一方において一部の都市では数少ない自市産輸出品に成長し、他方、都市による周辺地域の土地取得等によって都市域が拡大される中で、都市内での醸造が地域内で優位になり、都市周辺、近隣地域におけるビールの販売独占が図られ、周辺他都市、あるいは外国都市との競争にもつながっていったと考えられる。

例えば、リューベックの場合、リューネブルク Lüneburg 塩のバルト海への搬出を主目的とした当時のリューベック商人にとって重要なシュテクニッツ Stecknitz 運河建設にともなって14世紀末までの間に周辺地域の土地取得が進み⁵⁾、特に14世紀後半にはラウエンブルク Lauenburg、メルン Mölln におけるリューベック市、市民による土地取得が進展して都市域が拡大していった。このように、リューベックの拡大した都市域でのビール販売は、次第に地域内独占を目指すようになったのである。すなわち、リューベックのビール生産量は16世紀後半まで増加していたが、ダンチヒへのビール輸出は15世紀末以降減少していったのである⁶⁾。遠方の他都市、

4) ラインケは、ハンザ都市を4類型とその中間形態の5類型に分類している。それによればリューベックは遠隔地商業都市 Fernhandelsstadt に分類され、ハンブルク、ブラウンシュヴァイク、ヴィスマールは輸出生産都市 Exportgewerbestadt と遠隔地商業都市の中間形態に分類されるなど、主要なハンザ都市の都市経済は商業に大きく依存していることがわかる。H. Reincke, Die Bevölkerungsprobleme der Hansestädte. HGBll. 1951. S. 21, 28.

5) 高村象平『ドイツ中世都市』一條書店、1959年、124-160頁、斯波照雄『ハンザ都市とは何か—中近世北ドイツ都市に関する一考察—』中央大学出版部、2010年、61-70頁。

6) W. Stark, Lübeck und Danzig in der zweiten Hälfte des 15. Jahrhunderts.

他地域への恒常的な輸出の増大が考えにくいとすれば、すなわち、それはリューベックビールの自市内、周辺地域ならびにデンマーク南岸のスコーネン Schonen など近隣地域への供給量が増加していったことを示すものであり⁷⁾、市のビールの取引市場が近隣向けへと性格を強めていったことを示すものであろう。事実、リューベックのビール醸造業者はもともと輸出用ビールを生産するような特権的な手工業者ではなく、16世紀中頃に生産されたビールも約2/3が地域内消費のためのビールであったという⁸⁾。16世紀以降には多数のデンマークの漁師、農民の小型船がリューベックに入港しており、17世紀には多数のシュレスヴィヒ・ホルシュタイン Schleswig・Holstein やデンマークの漁師、農民によるリューベック市場における小規模取引が急増していたことが知られており⁹⁾、ちょうど同じ17世紀にリューベック市周辺でビールの醸造も禁止されたのである¹⁰⁾。市

Untersuchungen zur Verhältniss der wendischen und preussischen Hansestädte in der Zeit des Niedergangs der Hanse . Abhandlungen zur Handels- und Sozialgeschichte (以下 AHS. と略す). Bd. 11. Weimar 1985. S. 57ff. Blanckenburg, op. cit., S. 67, 78.

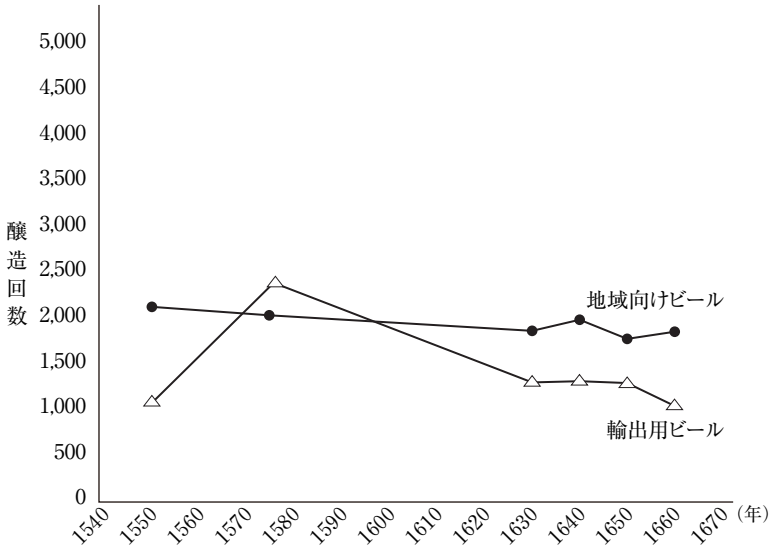
7) Blanckenburg, *ibid.*, S. 77-84. Huntemann, *op. cit.*, S. 27a. ダンチヒは有数のビール輸出都市であり(次節参照)、リューベックからビールを輸入していた理由は明らかでないが、18世紀の両市のビールには、リューベックビールの主原料が小麦であるのに対し、ダンチヒビールは大麦であるなどの相違点はあった。Der vollkommene Bierbrauer. Frankfurt/Leipzig 1784. 北原博/森貴史訳『18世紀ドイツビールの博物誌—完全なるビール醸造家—』関西大学出版部、2005年、127頁、133頁参照。

8) Blanckenburg, *ibid.*, S. 77-84. Huntemann, *ibid.*, S. 22.

9) B. Poulsen, Middlemen of the Regions. Danish Peasant Shipping from the Middle Ages to c. 1650. Regional Integration in Early Modern Scandinavia. ed. by F.-E. Eliassen/ J. Mikkelsen/ B. Poulsen. Odense 2001. pp. 56-79. 谷澤毅「ハンザ期リューベック商業の諸相—近年の研究成果から—」『長崎県立大学論集』第40巻4号、2007年、294-299頁。

10) K. Fritze, Bürger und Bauern zur Hansezeit. AHS. Bd. 16. Weimar 1976. S.

図1 近世リューベックにおけるビール生産



(出所) C. v. Blanckenburg, Die Hanse und ihr Bier. Brauwesen und Bierhandel im hansischen Verkehrsgebiet. Hansische Geschichtsquellen. Neue Folge. Bd. LI.Köln 2001. S. 83. より作成。

では16世紀後半以降ビール全体の生産高は減少していくが、市内、周辺、近隣地域向けのビールの生産高は減少していないのである（図1参照¹¹⁾。すなわち、都市圏における販売独占によって周辺、近隣地域の市場向けのビールの生産高は維持され、その結果ビール生産全体に占める近隣向けビールの割合は増加したと思われるのである。このように、リューベックにおけるビール生産の地域内独占の事例からは、地域内消費を対象としたビール生産が都市経済上一定の役割を果たしたことがわかるのである。

また、少なくとも15世紀頃からは、ビールは都市の歳入において重要な

50-53.

11) Blanckenburg, op. cit., S. 83.

役割を果たすようになったと思われる。例えば、表1のようにブラウンシュヴァイクではビール関連の税収は毎年400ブラウンシュヴァイクマルク Braunschweig Mark（以下Bマルク）以上に達し、特に1422年以降は500Bマルク以上に達した。その歳入総額に占める割合は、ビール醸造が盛んであったハンブルクですら15世紀前半には税収全体の10パーセントに達しなかったと思われるのに対し、1415年前後に多少落ち込むものの15パーセント前後を占め、間接税に占める割合は40パーセント以上であった。そのうち樽ごとに課税されたビール消費税は1406年以降300Bマルク前後の税収、1422と26年には400Bマルクを超える税収をもたらし、歳入総額のおおよそ10パーセント前後を維持しており、市内でのビール消費が大きかったことを示している。他方、ビール関税は1401、16年に100Bマルクを下回るものの、他の年には100Bマルクを超え、それは間接税のほぼ10パーセント以上を維持しており、継続的にかなりのビールが輸入されていたことが推測される。このように、ビール生産が盛んな都市だけでなく、市内の消費の一部を輸入に頼るような都市においても、ビール関連の税収が市財政に重要であったことを示している¹²⁾。

ハンブルクでは15世紀初頭から末にかけて人口は減少したといわれ、市内のビール消費量は減少し、15世紀後半から16世紀初頭にかけてのビール消費税は停滞している¹³⁾。しかし、その時期を除けば、ビール関連の税収は中世から近世、近代へと増加している。すなわち、15世紀中頃～末の年平均額と16世紀中頃～末のそれを比較すると、ビールに関する消費税

12) 拙著『ハンザ都市とは何か』92頁。O. Fahlbusch, Die Finanzverwaltung der Stadt Braunschweig 1374-1425. Breslau 1913. S. 166ff. H. Dürre, Geschichte der Stadt Braunschweig im Mittelalter. Braunschweig 1861. S. 314-347. 1 ブラウンシュヴァイクマルクは3.45リューベックマルクに相当。

13) E. Daenell, Die Blütezeit der deutschen Hanse. Bd. 2. Berlin 1906. S. 282f.

表1 ブラウンシュヴァイクのビール関連税と歳入 (単位: ブラウンシュヴァイクマルク)

年	1400	1401	1403	1406	1411	1412	1413	1414	1415	1416	1417	1418	1419	1420	1421	1422	1423	1424	1425	1426
ビール関連税		94	143	121.5	84	105.5	124	169.5	125.5	89.5	120	115	130.5	121.5	72.5	116.5	147.5	159.5	139	143
ビール消費税		192	182	282	298	287.5	267.5	276.5	337	315.5	343	328	285.5	328	380.5	403.5	351	391.5	391.5	438
ビール関連税合計		286	325	403.5	382	393	391.5	446	462.5	405	463	443	416	449.5	453	520	497.5	551	530.5	581
間接税合計	518.5	406.5	723	858.5	759	856	841.5	1,001.5	924.5	939	967	953	990.5	976.5	1,051.5	1,076.5	1,074.5	1,116	1,126	1,164
直接税	1,856.5	1,482.5	1,490	1,139	1,139.5	1,144	1,193	1,209.5	1,182	1,205	1,205	1,199	1,251.5	1,263.5		1,346	1,366			
歳入総額	3,029.5	2,745	2,835	2,561	2,196	2,300	2,633	2,491	4,521.5	3,487.5	3,635		3,089	3,114.5		3,519.5	3,011			
ビール消費税/間接税 (%)		47	25	33	39	34	32	28	36	33	36	34	29	33	36	37	32	35	35	38
ビール関連税/間接税 (%)		70	45	47	50	46	47	45	50	43	48	46	42	46	43	48	46	49	47	50
ビール消費税/歳入総額 (%)		7	7	11	14	13	10	11	8	9	9		9	11		11	12			
ビール関連税/歳入総額 (%)		10	11	16	17	17	15	18	10	12	13		13	14		15	17			

(出所) Die Chroniken der deutschen Städte vom 14. bis ins 16. Jahrhundert. Hrsg. durch die historische Kommission bei der bayerischen Akademie von Wissenschaften. Bd. 6. Leipzig 1868. S. 121-281. Urkundenbuch der Stadt Braunschweig. Hrsg. v. L. Hänselmann. / H. Mack. Bd. 1. Braunschweig 1873. S. 79-214. O. Fahlbusch, Die Finanzverwaltung der Stadt Braunschweig 1374-1425. Untersuchungen zur deutschen Staats- und Rechtsgeschichte. Bd. 116. Breslau 1913 (1970). S. 166ff. H. Dürre, Geschichte der Stadt Braunschweig im Mittelalter. Braunschweig 1861. S. 314-347. より作成。

Akzise は1444年と1553年に改変され、樽あたりの課税額が増額されるなどの変化があったにせよ¹⁴⁾、表2のように税収のうちビール消費税を含む間接税による歳入は10倍以上に増加しているのである¹⁵⁾。

17世紀初頭には再び市のビール醸造量は15万樽にまで回復し、15世紀後半から16世紀半ば過ぎまで減少し続けた市内のビール消費量も17世紀後半には急増していることから、ハンブルク市の醸造業は17世紀に入って復活し、最盛期を迎えたと考えられるのである¹⁶⁾。すなわち、市内のビール消費量は1685年には16世紀後半の6倍弱にも達し、しかも5倍の課税強化とも相まって、1685年には消費税収入は27万リュウベックマルク Lübeck Mark（以下マルク）におよび¹⁷⁾、1680年代には毎年おおよそ20～30万マルクの消費税を市にもたらしたといわれている¹⁸⁾。一般的には17世紀後半のヨーロッパは農業の不況期といわれ、全体的に購買力が低下したといわれているが、このようにハンブルクにおいてビール消費税収入が17世紀を通じて維持されたのは、三十年戦争で荒廃することもなく、市の人口が1600年の約4万人から1680年には5万8,000人へと増加し¹⁹⁾、農業不況の中でも、

14) ビールへの課税は16世紀の第1四半期まで一樽1シリング schilling であったが、1526年には2シリング、1539年には4シリング、1564年には8シリングと上昇し、1685年には40シリング（=2.5リュウベックマルク）となった。P. C. Plett, *Die Finanzen der Stadt Hamburg im Mittelalter (1350-1562)*. Phil. Diss. Hamburg Univ. 1960. S. 302f, 308. K. Zeiger, *Hamburgs Finanzen von 1560-1650. Hamburger wirtschafts- und sozialwissenschaftliche Schriften, Heft 34.* Rostock 1936. S. 30, 149f. Huntemann, *op. cit.*, S. 94ff. なお、関税もまた商品への課税であり、少なくとも当時の直接税と間接税という2つの範疇に分ければ間接税になるが、ここでは別枠で捉えることとする。

15) Bing, *op. cit.*, S. 302. Huntemann, *ibid.*, S. 142f.

16) Bing, *ibid.*, S. 315. Huntemann, *ibid.*, S. 95.

17) Bing, *ibid.*, S. 314. 注14) 参照。

18) Huntemann, *op. cit.*, S. 95. Bing, *ibid.*, S. 315.

19) W. Bohehart, „nicht brothlos und nothleidend zu hinterlassen.“

表2 14世紀中葉から17世紀前半のハンブルクの税収とビール消費税 (年平均) (単位: リューベックマルク)

年	1350-1400	1461-1496	1497-1521	1522-1562	1564-1578	1579-1602	1603-1619	1620-1630	1631-1650
直接税	2,713	6,074	6,789	12,449	29,049	34,248 ^②	78,380 ^③	209,929	249,933
間接税	119	2,130	1,938	11,640	24,893	32,520	67,405	230,040	354,727
合計	2,832	8,204	8,726	24,089	53,942	66,768	145,785	439,969	604,660
ビール消費税	119	171(1,958) ^①	(1,938)	(4,606) [7,034]	11,197	14,658	37,900	148,566	196,659
ビール消費税/直接・間接税 (%)	4	2(24)	(22)	(19) [29]	21	22	26	34	32
関税総額	288	2,732	2,644	6,818	19,161	46,034	79,705	163,876	169,246

(注) () は居酒屋税。[] は市民消費税。
 ①1464-96年では2119m。 ②他に1582-1602年に外国人への課税により1345m。の歳入 ③他に1607-19年に外国人への課税により7627m。の歳入

(出所) P. C. Plett, Die Finanzen der Stadt Hamburg im Mittelalter (1350-1560). Phil. Diss. Hamburg Univ. 1960. S. 79. K. Zeiger, Hamburgs Finanzen von 1560-1650. Hamburger wirtschafts- und sozialwissenschaftliche Schriften. Heft 34. Rostock 1936 S. 51-134. より作成。
 斯波照雄「ハンザ都市とは何か—中近世北ドイツ都市に関する一考察—」中央大学出版部、2010年、159頁より引用。

経済力と市民の消費生活水準の維持、向上があったというハンブルクの特
殊事情によるところもあるかもしれない。そして何よりもビールが生活上
不可欠なものであったことにもよるのであろう。

ハンブルク市のビール消費税収入は人口増加とも関連して表2のように
16世紀後半から17世紀初頭にかけて約3倍に、17世紀中頃にはそれから約
5倍にと急激に増加し、大幅な課税強化とも相まって1685年頃には頂点に
達したのである²⁰⁾。すなわち1564年に復活したビール消費税は間接税の半
分、直接税間接税合計額の21パーセント以上を占め、三十年戦争期にはビ
ール消費税のその割合は30パーセントを超えるに至っており、1620～30年
には関税を含めた全税収額の25パーセントを占めていたのである²¹⁾。ビ
ール醸造業の発展は間接税収入の増加に大きな役割を果たし、税収全体にも
貢献したといえよう。税収の増加は直接的には以上のような課税強化の結
果であったが、生活上不可欠なビール飲料へのこのような課税強化が可能
となった背景には、生産コストの低廉化による商品自体の価格抑制への継
続した努力があった点を看過すべきではなかろう²²⁾。

Untersuchungen zur Entwicklung des Versicherungsdankens in Hamburg.
Hamburg 1985. S. 14. 拙著『ハンザ都市とは何か』150頁。

20) Plett, op. cit., S. 247. 都市の発展、繁栄の指標には、貿易量、貿易額、人
口、財政規模の増大など様々なものが考えられ、例えば、ハンブルクの事例
で見られるように、財政規模の拡大が課税強化による歳入の増大を一因とす
る場合もあることは評価する上で考慮されるべきことであろう。拙稿「ハン
ザ都市ハンブルクの発展と醸造業」木立真直・辰馬信男編『流通の理論・歴
史・現状分析』中央大学企業研究所研究叢書26, 2006年, 94, 96頁参照。

21) Zeiger, op. cit., S. 100.

22) 17世紀後半には農業不況による穀物等の原料価格の低下が知られており、
1685年の課税強化にはそうした背景も考えられる。W. アーベル, 寺尾誠訳
『農業恐慌と景気循環—中世中期以来の中欧農業及び人口扶養経済の歴史』
未來社, 1972年, 221-230頁。

輸出醸造業の展開

ブランケンブルクがハンザのブレーメン、ダンチヒ、ハンブルク、リュエベック、ロストク Rostock、ヴィスマールの6都市について、ビール生産の最盛期に人口に対応した各都市のビールの市内消費量と輸出量を推定している。それによればリュエベック、ロストクのビール輸出量は約2万ヘクトリットルにすぎないのに対し、ブレーメンでは約14万、ヴィスマールでは約26万、ダンチヒとハンブルクでは約45万ヘクトリットルのビールが輸出されていたとされる。ダンチヒからは生産量の70%、ハンブルク、ヴィスマールからは77%のビールが輸出されていたであろうと推測されている。そして、この6都市だけで、市民消費量を超えて生産された「輸出ビール」量は約135万ヘクトリットル、約108万樽余にも及んだと推定されているのである²³⁾。

ハンブルクの場合でいえば、1376年の市民の職業分類では、1,175名中457名が醸造業者でそのうち181名が輸出向け醸造業者であった²⁴⁾。しかもハンブルクの手工業種は、醸造用の樽などを生産する桶屋を別とすれば、ほぼ純粋に市民や地域住民の生活上の需要に対応する職種であり、それらの職種は職内規定を手工業者の同職組合アムト Amt によって規定されていた。それに対し、ビール醸造業は近隣市場向け醸造業者でさえ職内規定は市参事会によって規定され、組織的にも例外的にアムトではなく兄弟団で結ばれるなど特別扱いであり、市における醸造業の重要性がよくわかる——桶屋の成員数の突出した多さからも市におけるビール醸造の重要性が感じられる——²⁵⁾。だが、当時醸造業者は市政においては中枢を担うには

23) Blanckenburg, op. cit., S. 226f.

24) J. C. M. Laurent, Über das älteste Bürgerbuch. ZVhG. Bd. 1. 1841. S. 147. Reincke, op. cit., S. 20ff.

至っていなかった。その不満は1410年に反市政運動となって表面化し、それは市参事会の譲歩を引き出し、醸造業者は市政の中枢の一部を成すに至ったのである。それを一因として、以後、醸造業などへの課税強化により市財政の安定をはかりつつ、醸造業の発展を目指した政策を遂行するという難問に対応することができたと考えられるのである²⁶⁾。

ハンザ都市では中都市に分類されるヴィスマールでも、14世紀の前半から自市産のビール醸造に関して様々な規制が強化され、良質なビールの輸出が増加したといわれている²⁷⁾。14世紀後半から本格化した北欧へのホップ輸出も15世紀後半以降活発化した²⁸⁾。遠隔地商業を経済基盤とするハンザ都市が圧倒的に多く、参事会員もまた大半が大商人層で占められることが多かったが、ヴィスマールでは15世紀後半には醸造業者が市参事会の大半を占めるなど、政治的に市の醸造業者が市の中枢を掌握するのと並行して²⁹⁾、市のビール醸造業は15世紀前半から16世紀後半に醸造量を倍増し、輸出量を増加させて市の経済を支える存在に成長したのであった³⁰⁾。

各都市のビール醸造業の発展過程は様々であろうが、ハンブルクの場合醸造規定の変更が醸造業を大きく発展させたと思われる。ハンブルクでは醸造に関する規定を定めた規定書 *Burspraken* の1465年の醸造規定で「手工業者は同時に醸造人であってはならない」とされ、16世紀の醸造規定で

25) *Hamburgische Burspraken 1346 bis 1594 mit Nachträgen bis 1699*. Bearb. v. J. Bolland. Veröffentlichungen aus dem Staatarchiv der Freien und Hansestadt Hamburg. Hamburg 1861 (1971). Teil 2. Nr. 6, 12. *Burspraken* は市参事会による規定書。

26) 斯波照雄『中世ハンザ都市の研究—ドイツ中世都市の社会経済構造と商業—』勁草書房、1997年、109-123頁参照。

27) Techen, *Das Brauwerk in Wismar*. I. S. 266ff. Vgl. Reincke, op. cit., S. 6.

28) Techen, *ibid.*, S. 324.

29) Techen, *ibid.*, S. 267. Blanckenburg, op. cit., S. 105-108.

30) Techen, *Das Brauwerk in Wismar*. II. S. 165-167.

は「小さな家での醸造禁止，木の破風の家での醸造禁止……」と規定されたのである。すなわち，安定した生産のできない中小の醸造業者を排除し，自由な生産を排し，生産条件を厳格化することによって品質の不均等の問題を解決し，一定品質の維持を実現したのである³¹⁾。それとともに，14世紀～15世紀前半には生産過剰であったビールの生産量を抑制してコスト削減を図り，価格の低廉化を実現した。生産条件の厳格化が常に図られ，それはビール醸造業を一般市民の参入できない市における特権的な存在にもしたが，品質の維持，向上と生産量の調整による価格の低廉化によって，15世紀末にはハンブルクビールの輸出量は10万ヘクトリットルにもおよび，しかも5万ヘクトリットルはビールの醸造が盛んであったオランダに輸出された³²⁾。しかし，15世紀に16万8,000樽の生産であった市の全ビール醸造量も16世紀には10万樽にまで減少し，市のビール醸造業が一時停滞していたとも推定されている³³⁾。その原因は市の人口減少とオランダのビールの攻勢によるものと考えられているが，ハンブルクではそうしたビールの販売の停滞の際にも，継続して品質向上に努力するとともに，おそらくは生産量の調整も行い，販売組織の充実を実現した結果，ハンブルクビールは，オランダの高関税下にあっても競争力を失わず，オランダビールを凌駕したのであった³⁴⁾。ハンブルクでは良質かつ安定した量のビール

31) *Hamburgische Burspraken*. Teil 2. Nr. 55. 10, Nr. 110. Bing, op. cit., S. 293. Huntemann, op. cit., S. 157.

32) E. Daenell, *Die Blütezeit der deutschen Hanse*. Bd. 1. Berlin 1905. S. 266f. 高村象平『ドイツハンザの研究』日本評論新社，1959年，130頁。Blankenburger, op. cit., S. 33-57. Vgl. K.-J. Lorenzen-Schmidt, *Bier und Bierpreise in Schleswig-Holsteins Städten zwischen 1500 und 1560*. Studien zur Sozialgeschichte des Mittelalters und der Neuzeit. Hrsg. v. F. Kopsch/K.-J. Lorenzen-Schmidt. Hamburg 1977. S. 132ff. Huntemann, *ibid.*, S. 40, 245.

33) Bing, op. cit., 288f. Huntemann, *ibid.*, S. 17.

34) Bing, *ibid.*, S. 293. Huntemann, *ibid.*, S. 31. 拙稿「ハンザ都市ハンブルク

供給によってビール醸造業は発展し、低地地方など販売領域が重なるブレイメンのビールにも勝利をおさめることができたと考えられるのである³⁵⁾。

リューベックがハンザの領袖として、常にオランダ、イギリスと対抗し、結果としてハンザと運命をともにしたのと異なり、ハンブルクはオランダ、イギリスからの移住をおそらくは積極的に受け入れ、ハンザがオランダと敵対している時でもオランダとの通商を維持し、他方、オランダと対抗関係にあるイギリスとも接近して1567年にはイギリスに商館を確保し、関税特権を獲得するなど政情不安定の中でも一貫して通商関係の拡大を図ってきたのであった³⁶⁾。それを可能にしたのは、ハンブルクが各地の商品の中継基地というだけでなく、ハンブルクには特産品に成長した優良なビールがあったからであり、その販路拡大が図られてきたからであると思われるのである。すなわち、品質の向上・維持と安定的な生産量による無駄のない供給は、良質かつ低廉なハンブルクビールの販路を拡大し、それと連動して他の商品流通も活発化したと考えられるのである。

しかし17世紀には17の都市、地域からであった市への外地産ビールの流入は、18世紀には55へと急増し、そのうち20がアルトーナ Altona をはじめとする近隣地域からもたらされたものであった³⁷⁾。18世紀に入ると旧来の規定に基づいて生産されてきたハンブルクのビールは、積極的に新しい

の発展と醸造業」93-102頁。

35) Blanckenburg, op. cit., S. 41. Hamburgische Chroniken in niedersächsischer Sprache. Hrsg. v. J. M. Lappenberg. Wiesbaden (1861) 1971. S. 235. 阿部謹也「中世ハンブルクのビール醸造業と職人」『一橋論叢』第83巻第3号, 1957年, 343頁。

36) E. Wiskemann, Hamburg und die Welthandelspolitik von den Anfängen bis zur Gegenwart. Hamburg 1929. S. 76f. 高村『ドイツハンザの研究』206頁。Plett, op. cit., S. 247.

37) Bing, op. cit., S. 319, 321.

技術を取り入れて生産された安価で良質な近隣地域等のビールに敗北していったのである。18世紀初頭にはワイン、中頃からはコーヒー、紅茶、ブランデーなど多様な嗜好品が大量に流入し、それまで圧倒的にビールに依存してきた生活を、多様な飲料を消費する生活に変化させ³⁸⁾、以後さらに市のビール醸造業を衰退へと追い込んだと思われる³⁹⁾。北ドイツではビールは「生活の潤いと糧」といわれ⁴⁰⁾、市内の有力商品としてハンブルク市での生産も盛んであったが、もはや旧来からの限定された醸造業者による厳格な規定のもとでのビール生産がその価格低廉化、品質向上の弊害となる状況下で、市外各地からのビールが大量に流入するようになっただけでなく⁴¹⁾、こうした市民生活の変化が市のビール醸造業の急激な衰退をもたらした。ビールの消費税収入も1711年から20年には、外地産ビールにかけられた市内産ビールの2倍の消費税を含めても13万1,000マルクに減少している⁴²⁾。1751年には醸造規定が改定され、ついに旧来のビール醸造に関する厳しい規制は解除された。19世紀に入ると、1810年には17の醸造所において、それぞれ近代的施設への転換が行われ、規模も18世紀のほぼ倍になったといわれるが、他の飲料消費の増加によりビールの消費は減少し、その消費税歳入は5万マルクから5万3,000マルクであり、1世紀前の半分にも満たなかった（表3参照⁴³⁾）。ヴィスマールでもビール醸造業はハン

38) Blanckenburg, op. cit., S. 62. E. Baasch, Weinakzise und Weinhandel in Hamburg. ZVhG. Bd. 13. 1908. S. 104.

39) Bing, op. cit., S. 314-320. E. Baasch, Zur Statistik des Ein- und Ausfuhrhandels Hamburgs Anfang des 18. Jahrhunderts. HGbl. 54. 1929. S. 90-116. Statistik des Hamburger seewärtigen Einfuhrhandels. im 18. Jahrhundert. Bearb. v. J. Schneider /O. Krawehl/ M.Denzel. St. Katharinen 2001. S. 287-588.

40) Huntemann, op. cit., S. 186f.

41) Bing, op. cit., S. 309f, 319f.

42) Bing, ibid., S. 315, 319.

表3 近世ハンブルクのビール消費税（単位：リユーベックマルク）

	1675-85年平均	1685年	1711-20年平均	1810年
ビール消費税額	197,000	270,000	131,000	50,000

（出所） W. Bing, Hamburg Bierbrauerei vom 14. bis 18. Jahrhundert. Zeitschrift des Vereins für hamburgische Geschichte. Bd. 14. 1908. S. 315, 326. より作成。

ブルクよりも早く、17世紀末以降輸出用ビールの醸造回数は急速に減少し、醸造業は衰退し、市の参事会から醸造業者は消え去っていったのである⁴⁴⁾。

ハンブルクでは17世紀末頃には以前にも増して醸造業は大商人のもとで展開されたといわれている⁴⁵⁾。その大商人たちはむしろビールよりも諸外国産のワインや植民地物産の紅茶、コーヒー、砂糖などに利益を求めようになったのではないかと思われる。すなわち、外洋からエルベ河を約100キロメートルも遡った河口の港ハンブルクが植民地物産の集散地となったのは、外洋からはるかに内陸に入り込んだフランスワインの産地ポルドー Bordeaux に植民地物産が集まり、ワイン流通網が植民地物産の流通網として機能したように⁴⁶⁾、ビールと関連して成長してきた流通網が、新大陸から流入する大量の新商品など多様な商品の流入に対応したものへと移行、拡大していったからではなかったかと考えられるのである⁴⁷⁾。

43) Bing, *ibid.*, S. 326. Huntemann, *op. cit.*, S. 169, 176, 186ff.

44) Blanckenburg, *op. cit.*, S. 102, 106f.

45) E. Baasch, *Handelskammer zu Hamburg 1665-1915*. Hamburg 1915. Bd I. S. 224f, Bd. II 1. S. 431.

46) 玉木俊明『北方ヨーロッパの商業と経済—1550-1815年』知泉書館、2008年、285頁および同頁注58) 参照。

47) Statistik des Hamburger seewärtigen Einfuhrhandels. S. 304f. Bing, *op. cit.*, S. 327-329.

おわりに

ビールは生活上必要なものとして自家醸造による自由な生産が行われ、中世以降地域経済にとって重要な商品として各都市で発展してきた。中世から近世にかけて税収が直接税から間接税へと重心移動する中で、ビールは消費税の課税強化によって各都市の大きな財源となって財政安定をもたらした。他方で、販売競争激化あるいは輸入商品への高関税といった厳しい社会環境の中でビールの消費、輸出の停滞等の危機に対応した対策が、結果として、良好な品質の維持、需要に見合った生産、効率的な低コストでの生産を実現し、高関税下の販売競争に耐えうる低価格のビールは、輸出品としても都市に利益をもたらした。逆に生産面で劣る都市では、輸入ビールからの関税収入が都市に安定した歳入をもたらした。それらは以後ハンザが停滞傾向を示す中にあっても、ハンザ都市が経済的になお繁栄を維持した一因にもなったであろう。

都市が都市周辺地域におけるビールの独占を通じて地域の中心としての性格を強める場合もあった。すなわち、リューベックでは、古くから地域内消費用の低品質のビールが周辺地域に供給されていたが、以後次第に都市周辺地域での醸造が禁止され、市産ビールが独占的に販売されるようになった。それは、市を経由する遠隔地商業が停滞する中で、市が都市周辺地域の商業の重要性を意識した結果ではなかったか。そうした市を中心とした地域内での独占的な生産、販売体制の強化は、他都市と連帯して商業を行う旧来のハンザの体質を大きく変え、弱体化を促進したと考えられる。このようにハンザ都市におけるビール醸造業の展開からはハンザの停滞とハンザ都市の繁栄維持は同時に進行していたことが推測されるのである。

ハンブルクやヴィスマールでは、ビール輸出によって市の経済は発展し

た。そのうちエルベ Elbe 河流域に広大な後背地を有するハンブルクではビール醸造業は、その発展と連動して他の商品の輸出入を促進し、近世の商品流通網を育成して、以後流通基地として都市の発展を実現したと考えられるのである。しかし、ヴィスマールでは17世紀に、ハンブルクでも18世紀には旧来の規定に基づいて生産されたビールは、自由に新しい技術によって安価に生産された良質のビールに敗北し、さらにコーヒー、紅茶などの飲み物が市民生活に浸透する中で急速に衰えていった。だが、ハンブルクのビール醸造と関連した大商人の植民地貿易への以後の関与は明らかではないが、少なくともビール流通網は植民地物産の流通網として機能し、海洋貿易だけでなく内陸河川、運河交通の進展をももたらし、ハンブルクは植民地物産の集散地として以後急速に発展していったのではないかと思われるのである⁴⁸⁾。

付記 本稿は第54回北陸史学会大会（2012年11月）における報告原稿を加筆修正したものである。

48) 醸造業に関連した大商人層が具体的に以後の市経済においてどのような役割を果たしたかは今後の課題である。おそらくは、ユグノーなどの組織が中心となって植民地物産はヨーロッパにもたらされたのであろう。しかし、オランダがバルト海地域にフランス西海岸からベイ塩をもたらした時、リユーネブルク塩を独占していたリユーベック商人がそれと並行して大船団をもってベイ塩貿易に進出したことを考えると、彼らもまた決して手をこまねいていただけではないと思うのである。Vgl. H. Kellenbenz, *Sephardin an der unteren Elbe. Ihre wirtschaftliche und politische Bedeutung von Ende des 16. bis zum Beginn des 18. Jahrhunderts*. Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte. Beiheft 40. 1958. S. 203ff.